

東海道五十三次を往く

第39回



江戸時代にタイムスリップしたかのような町並みが続く。

関宿

東海道随一の江戸期の面影が残る宿場町

関宿は江戸時代に東海道が整備されるよりもはるか昔の古代から交通の要衝として栄え、古代三関のひとつ「鈴鹿関」が置かれた。関の名もこの鈴鹿関が由来になっている。東海道五十三次の多くの宿場は第二次世界大戦の戦禍によって焼失してしまったが、ここ関宿は戦禍をまぬがれ、歴史的な町並みが往時のまま残る貴重な宿場となっている。そのことから国の「重要伝統的建造物群保存地区」にも選定されている。

関宿の東の入口であり、伊勢別街道の分岐点でもある東追分から関宿に入ると、すぐに連子格子や虫籠窓がある民家が連なり、いきなり江戸時代にタイムスリップしたかのような気分になる。しばらく歩くと左手に「関の山車会館」がある。「一生懸命やってもこれが限界」という意味の「関の山」の語源がここからきていることは意外と知られていない。川北本陣跡を過ぎると眺関亭という関の町並みが一望できる展望台があり、さらに進むと、旅籠玉屋歴史資料館がある。地藏院を過ぎてしばらく歩くと、関宿の西の入口にあたる西追分に着く。ここは大和街道の分岐点でもある。



関の山車(せきのやま)の語源

関町の山車が非常に豪華で、「これ以上の贅沢はできない」ということから生まれたという説や、狭い関宿を山車が道幅を「限度いっぱい」練った様子から生まれたという説などがある。



東追分の大鳥居

東追分の伊勢別街道の入口にある大鳥居は伊勢神宮を遷すためのもので、20年に一度の伊勢神宮式年遷宮の際、内宮宇治橋南詰の鳥居が移されたもの。常夜灯や道標も残されている。

「写真でたどる、現代の東海道五十三次を往く」
上巻(日本橋～袋井宿)好評発売中!



人気連載「東海道五十三次を往く」が待望の書籍化! 写真をより大きく使い、迫力や臨場感を増して、現代の東海道を紹介している。定価は1,650円(税込)。お求めは全国の書店、ネット通販などから。

お求めはこちらからも!





本陣早立 広重が関宿を描いた「本陣早立」は、本陣に宿泊した大名の出立の様子を描いている。川北本陣がモデルだといわれているが、今は石の標柱があるだけだ。

街道の食

山菜おこわ定食

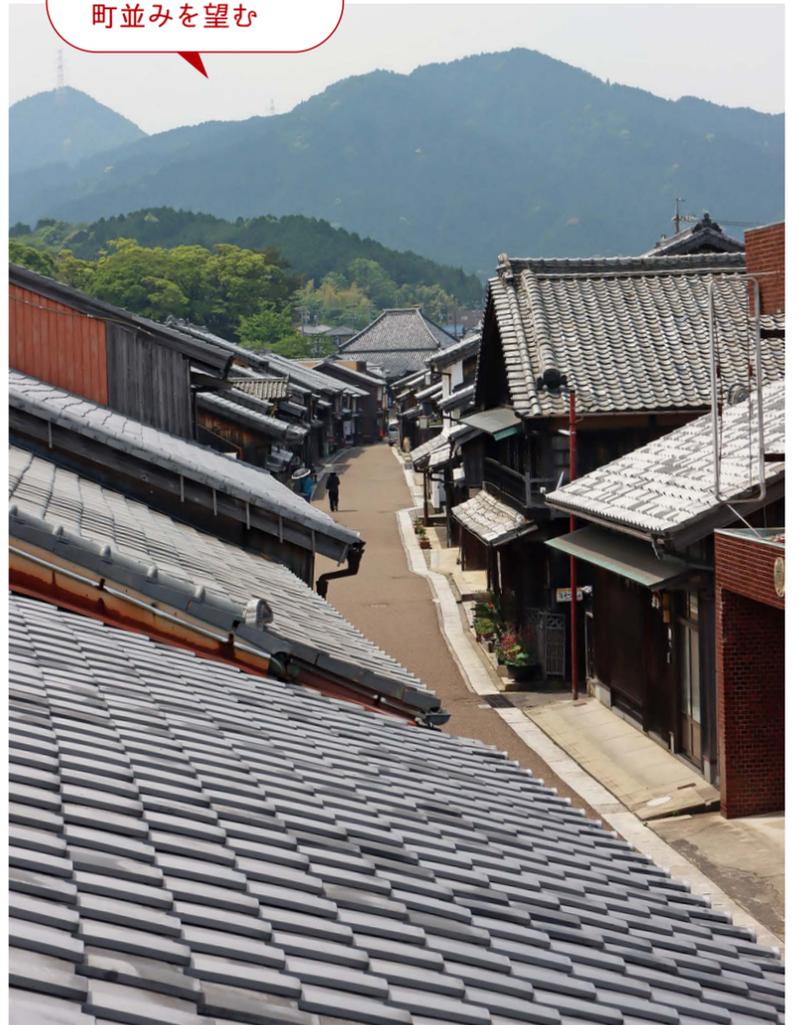
元々は「旅籠 會津屋」という関宿を代表する大きな旅籠で、建物は江戸後期に作られた。名物の山菜おこわは、せいろ蒸したもち米に鶏肉、わらび、人参、しいたけ、ごぼうなどの具材を混ぜ合わせており、そばとセットの定食が人気。

會津屋

三重県亀山市関町新所 1771-1
☎ 0595-96-0995



眺関亭から関宿の町並みを望む



洋館風の建物も町並みに溶け込んでいる



関宿旅籠玉屋歴史資料館

江戸時代、玉屋は関宿を代表する大旅籠の一つで、現在は修復され、歴史資料館となっている。「玉屋」の屋号にちなんで宝珠の玉をかたどった虫籠窓がある。

地藏院

天平13(741)年開創と伝えられ、「関の地藏に振袖着せて、奈良の大仏様に取る」と唄われるほど美しく円満な顔立ちの地藏は、近郷の人たちや東海道を旅する人々から信仰を集めた。本堂、鐘楼、愛染堂の三棟が国の重要文化財に指定されている。



街道の土産

志ら玉

江戸時代より旅人に親しまれてきた「志ら玉」は、北海道産の小豆で作ったこし餡を上新粉の生地で包んだ素朴な白玉団子。



前田屋製菓

三重県亀山市関町中町 407
☎ 0595-96-0280

銘菓 関の戸

関宿で江戸時代寛永年間より作り続けている「関の戸」は、赤小豆のこし餡を求肥餅で包んで和三盆糖をまぶした餅菓子。



深川屋

三重県亀山市関町中町 387
☎ 0595-96-0008